

論文要約

中国広東方言の歴史的考察 —母音の音韻変化を中心に—

山崎 誠

本論文では現在の中国南方方言の一つ「広東語」の音韻的特徴を考察するにあたり、中国の標準語である「普通話」との音韻体系の相違点や、韓国語、ベトナム語などの漢字圏における音韻の類似点を紹介しながら広東語の音韻的特徴を考察していく。

特に広東語の音韻体系において、近代で起こったとされる単母音から二重母音への推移を中心のテーマとして、マカオの街道名の資料やマカオ、香港、広州(Canton)で出版された19世紀初頭の辞書や語彙集などの考察を通して、当時の広東語の音韻を調べた。

第1章では先行研究について考察した。古代の中国においては中国漢代における揚雄の『輜軒使者絶代語釋別國方言』を参考にした。この文献は、揚雄が現在の四川省にあたる蜀郡成都の出身であったことから、都に往来する各地方の人々の言葉を集めた字書を編纂したと伝えられている。

漢代の広州は南越国の首都であり、漢とは別国であったため、『方言』における分類においては「南楚」、「桂林」などの「郊外」として記述されていた。

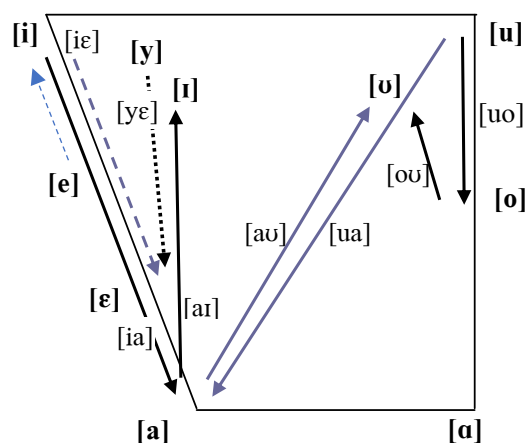
現代の広東語の先行研究としては、李新魁、彭小川、高田時雄などの著書から、十九世紀から現代に至るまでのあいだに広東語の母音に、 $i \rightarrow ei$ 、 $u \rightarrow ou$ 、 $y \rightarrow \text{ø}y$ の変化が起こったことがわかった。

第2章では広東語についての歴史的考察をまとめた。中華人民共和国には「普通話」と呼ばれる標準語以外に、さまざまな方言がある。『言語学大辞典』では、中国の方言を、「北方語」、「呉語」、「湘語」、「贛語」、「客家語」、「閩語」、「粵語」のように、大きく七つの方言に分けられている。そのうちの「粵語」は、いわゆる中国南方に位置する広東省を中心として話されている「広東語」の通称である。現在の広東省は古くは「百越」とよばれ、多くの少数民族が居住する地域であり、漢代の頃の広州は南越国の首都であった。漢とは別国であったため、『方言』という古典の分類においては「南楚」、「桂林」などの郊外として記述されている。

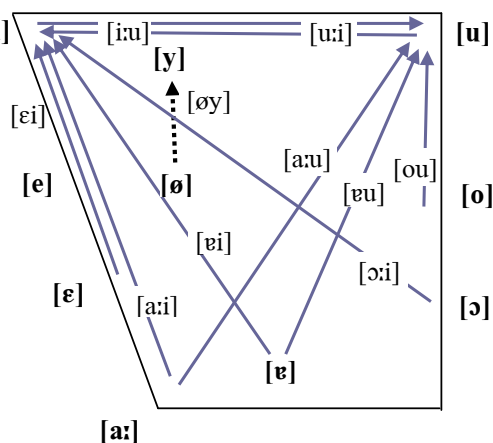
第3章は広東語の音韻について考察を行った。

標準中国語の単母音は/a, e, i, u, y/の5母音体系であり、また現代広東語の単母音には母音に長短があり、/a, e, æ, i, u, y/の7母音体系 となる。二重母音に関しては、以下の図にまとめた。

標準中国語の二重母音



広東語の二重母音



< 中国

標準語の二重母音の特徴 >

/ai/ ⇔ /ia/、/au/ ⇔ /ua/、/ou/ ⇔ /uo/、/ei/ ⇔ /ie/
 対応なし /ye/

< 広東語の二重母音の特徴 >

-i 系 /a:i, ai, ei, ɔ:i, u:i/
 -u 系 /a:u, au, i:u, ou/
 上記以外 /øy/

中国標準語(以下普通話と言う)の二重母音は音を往復するようにペアになっており、広東語は副音が-i または -u の系統に分けられる。このように二重母音からも言語のもつ特徴を表すことができることがわかった。

しかし、普通話の ye、広東語の øy に関してはどちらも対応せず、孤立した状態であった。調べてみると、普通話の ye は、もともとは語末子音(入声)の -t をもっており、近代にこの音が消失したため、他の音韻との対応からずれてしまったと考える。次に広東語であるが、この øy も先述した先行研究では、もともと y であり、二重母音化したため二重母音の体系からズレたのではないかと考えた。

第4章は実際に文献からの考察を行った。

日本の文献では福沢諭吉による萬延元年(1860)発行の『増訂 華英通語』について調べ、その序文の説明によると、この著書は当時サンフランシスコの港に到着した福沢が清の商人から『華英通語』を入手し翻訳した英語及び中国語対訳の語彙集であるとのことであった。香港およびマカオでキリスト教の布教活動や政府機関で広東語に携わった西洋人が残した辞書や著書の記述を参考にし、当時の英語やポルトガル語での表記を見比べつつ当時の音について考察した

当時ポルトガルが統治していたマカオでは、ポルトガル語と広東語が併記されている街道名の冊子が現存しており、その中で音訳されている広東語音を整理すると、ほとんどが単母音で表記されていた。

またイギリスが統治していた香港、そして中国でありながら租借地などもあった広州の文献を調べると、該当する漢字音は二重母音が主であったことがわかった。

これは地理的にマカオが海を隔てた香港や河の上流に位置する広州よりも、陸繋がり移動できる中山地方に近いことから、中山方言の影響を受け、単母音を体系にもつ可能性が強いという考えもある。

しかし広東省以外の中国の方言と比べてみても広東語の該当する母音が二重母音化していることは比較的簡単に見つけることができ、さらに日本、韓国、ベトナムの漢字音との比較からも現代音では広東語が二重母音化していることがわかる。

第5章は実際にマカオで発行された街道名の冊子(1990年および1906年)を考察し、当時の音韻の状況に触れた。その結果、19世紀の広東語のポルトガル語音訳は単母音が主流であったことがわかった。

第6章は中国語音韻論からの考察を行った。

まず、音韻を分析し、広東語の二重母音化した漢字を歴史的に考察しようと試みた。中国の中古音(隋唐音)を反映しているといわれている『廣韻』を参考にして、当時の音韻がどのように説明されているかを見てみた。しかし、「反切」(漢字音を表すのにほかの漢字を用いてその音価をあらわす方法)で書かれているため正確な音価はわからない。そこで先行研究からその音価を借り、当てはめていくことで、その時代の音韻を整理できた。そして中古音の『韻図』に該当する漢字は整理することはできた。しかしながら現代広東語の二重母音化は考察できなかった。このことから、この時代の変化の詳細はわからなかった。

そして次に、広東語の韻書であるといわれている『分韻撮要』という文献を考察した。これは『廣韻』と似たような構成であるが、広東語をベースに音韻を整理してあり音の考察が可能である。しかしながら、この『分韻撮要』からも漢字音の特定は『廣韻』と同じであったため、この時代も二重母音化が起こっていない可能性がみられた。

このように考察したが、古い書物は漢字の特定には有効であったが、漢字量がおおいため時間的な問題や漢字は表意文字であるために、漢字からの考察は限界があると本論文では結論づけた。

第7章はさらに漢字音を歴史的に考察した。日本語漢字音は呉音と漢音、和音などを日本書記の漢字音から次のように考察した。日本漢字音で「呉音」、「漢音」の区別は辞書でも分類がなされているが、日本漢字音を説明するには、もう一つ「和音」に同化したような「漢語」も存在する。遣隋使・遣唐使、留学僧らの影響で漢語が発展する以前に、大陸の文化を受け入れた際に一緒に日本に伝えられたものであると言われているが、それが梅、馬、菊、絹などの語であると言われている。漢字古今音資料庫による王力の音を参考に和音と中古音の対応を比べる。

いずれも2音節であることから日本語化して留学僧らが持ち帰った音とは違う性質のものであると考えられている。その他に朝鮮漢字音とベトナム漢字音の類似性も示し、韻書を利用して音韻の分析を行った。

第8章は音韻変化について先行研究の分類を広東語に当てはめて考えてみた。

時代背景から考えると、18世紀後半からの現広東省のマカオがポルトガルに自治権を譲渡することから始まり、イギリスが香港を獲得し当時の広東地域の中心となるあたりである。このことから、社会的な要因としてはマカオの広東語から香港の広東語へとその潮流が移動したことが考えられる。マカオに関しては、当時の住民の出身地が中山地方であり、そのため中山方言が中心であったと考えられている。つまり当時のマカオでは広東語の i, u, y は二重母音化しておらず、単母音であったとみられる。

第9章は、本論文の結語として音韻変化について考察した。

まとめとして、「広東語が経てきた音韻変化」は、普通話との比較の中で見えてきたことは、「母音の変化」である。この二重母音化の考察を重ねるにあたり、変化の特徴を考えてみた時、以下の結論にたどり着いた。

広東語は、「母音」を変化させることで音韻体系を保ってきた

普通話は、「子音」を変化させることで音韻体系を保ってきた

広東語はその音韻変化の中で語頭の子音は中古音をよく反映しており、語末の子音である入声も保っている。この音韻体系こそが広東語の特徴であるため、母音を音韻変化させることで変化の流れを受け止め、音韻体系を保っているのではないか。反対に普通話に関しては、北方方言が清朝の満州、ツングース諸語などのアルタイ語の影響を受けてきたこともあり、口蓋化などが進んだと言われている。そのため、語頭の子音の音韻を変化させることで母音の音韻体系を保ってきたのであろうと考える。

言語変化について、Rudi Keller(2005)は、アダムスミスの見えざる手を例に言語変化は見えない力の影響を受けていると説明している。この見えざる力がその言語にとって良いものか悪しきものかはわからない。しかし時代の中で広東語を変えようとするこの力を受け入れるまたは抵抗するかのように音韻変化をもって今の広東語を作り上げてきたと考えた。